

ベルクソンの直観における実在性と形式性

清塚 明朗

キーワード：直観、ベルクソン、実在性、形式性、潜在的多様性

1. 実在と認識作用の一致としての直観

実在 *réalité* は、ベルクソンをはじめ、19 世紀フランス哲学（とりわけ、フランス・スピリチュアリズム）を象徴する、眩惑的な言葉である。そのような哲学においては、実在は、それ以上遡行して問うことができない根拠のように考えられていて、実在を捉えることが哲学の一つの目的であるように思われる。ベルクソンが自身の哲学的方法論として認める直観もまた、認識主体に由来する認識の形式や概念に相対的な認識とは異なる、実在を内から捉える絶対的な認識として企図されている。

とはいえ、この直観が、現象の背後にある実在を捉えることができる、超越的で神秘的な能力だとするのは単なる誤解にすぎない。もちろん、主観に相対的ではない、対象の絶対的な認識が可能であるかどうかを問い直すことはできるし、そのことは必要でもあるだろう。しかし、それでもなお、直観を超越的で神秘的な能力だとすることが誤解であるところで述べることで確認しておきたいことは、ベルクソンはカント的批判を超えることができていたということではなく、むしろ、直観という語の理解と実在という語の理解とが相即的であるということである。

直観を超越的で神秘的な能力だとする誤解は、実在との関係で次のように言い換えることができるだろう。実在は主観とは独立に存在するもので、直観は、主観の枠組みに適合する形で、その限りで歪められた形で捉えるのではなく、そのような実在をありのままに捉える。だが、ベルクソンが考える実在と直観はこのようなものではない。

反対に、直観が実在との一致として理解することができるとしても、そもそも実在は認識作用と独立に存在しているわけではない。そうではなくむしろ、実在はそれが認識作用と一体になっているときにのみ現れる。直観は、実在と認識作用を切り離すことができない、内在的な認識のことである¹。

実在と認識作用が分かたれない認識のことを、ベルクソンは絶対的な認識と考えている。ベルクソンがその例として確信をもって挙げるのは、自我の覚知である²。1908 年の「フランス哲学会」において、彼は次のように述べている。

すべての人にとって、内部から自らの対象を捉え、覚知と存在がただ一つのものでしかない場合に自分自身を覚知するように、それを覚知する認識は、絶対的な認識、絶対的なものの認識であると、私には思われます。[...] 制限された認識が必然的に相対的な認識であることを証明するためには、例えば、自我が全体から切り離されると、自我の本性が変わることを立証しなければなりません。ところで、『創造的進化』の目的の一つは、それとは反対に、全体が自我と同じ本性に属していること、しだいに十全になる自己自身の深まりによって全体が捉えられるということ、これを示すことです。(M, p. 774)

自我に気づくことと自我が存在することが一致する場面こそが、自我の認識である。自分自身に対して意識的になること、すなわち反省こそが自我を現れさせ、自我の認識を可能にしている。自我の認識について

は確かにそのように言える。

直観と実在は切り離して語ることはできないのである。認識主体に相対的ではない認識について、ベルクソンは同じく次のようにも語っている。

後書『『創造的進化』』においては、直接的な直観は生の本質も物質の本質も捉える、ということを立証しました。認識が主体に由来し、認識によって直接的な所与が対象的であることが妨げられると述べてしまうことは、とても異なる二種類の認識の可能性をアприオリに否定することです。すなわち、その一方は概念による静的なもので、というのも実際、そこでは、認識するものと認識されるものの間に分離があります。もう一方は、直接的な直観による動的なもので、そこでは、認識の作用と実在を発生させる作用とが一致します。(M, p. 773 強調引用者)

二種類の認識についての対比のさせ方から、直観における一致ということでベルクソンが考えているのが、単純に、認識する主体と認識される対象との一致のことではないことが分かるだろう。この引用の中で直観を特徴づけているのは、「認識する作用」と「実在を発生させる作用」との一致、言い換えると、覚知と存在が一体となっているということである。そして、自我の認識を例にとれば明らかなように、その場合「認識する作用」＝「実在を発生させる作用」は、自我をありありと現前させる覚知の作用のことである。

以上のことからして、ベルクソンが考える実在がいかなるものであるのかを理解することを抜きにして、彼の直観を正確に論じることはできないのである。それゆえ、例えば、共感や本能という語とともに語られるベルクソンの直観とは認識の名に値するのか、カント的批判を超えてベルクソンの直観に妥当性があるのか、のような問いに答える際にも、ベルクソンの実在観がつねに参照される必要がある。

さて、本論文の試みは、それらの問いに答え、ベルクソンの直観を基礎づけることに寄与することを目的としている。しかしながら、本論文内でそのすべてを達成することはできないので、ここでは、『創造的進化』(とりわけその第2章)における直観の対象となっている実在がどのようなものであるかを明らかにすることだけに、課題を限定したい。

この課題は先の二つの引用から直接導かれるものである。引用からの表現を用いれば、この課題は次のように表現される。「認識の作用」と「実在を発生させる作用」との一致という直観の特徴を、自我の覚知に見出すことは確かにできる。しかし、個体的な認識を超えて、生や物質の認識を語る『創造的進化』においては、「実在を発生させる作用」とはどのようなものであるのか、そして認識作用と「実在を発生させる作用」とが一致するとはどのような事態のことであるのか。

これらの問いは、個人の心理学的生(の持続)をその対象としていた『意識に直接与えられたものについての試論』ではなく、生一般をその対象としている『創造的進化』だからこそ問題にされなければならないし、『創造的進化』の主要な目的の一つだと言ってもよい³。

単にそれらの名前をベルクソンのテキストから取り出してくるだけなら難しくはない。実在を発生させる作用とは「生の流れ」(EC, p. 179)のことであり、そして認識の作用と実在を発生させる作用との一致とは、「共感」(EC, p. 177)のことである。しかし、その内実を適切に説明することは容易ではない。以下では、「素材に形を与える informer 生」(EC, p. 154)という、『創造的進化』における表現を発想の端緒として念頭におきながら、ベルクソンが考える形式＝形相／内容＝質料 *forme/matière*⁴の関係から実在の一つの特徴を明らかにし、そのことによって認識の作用と実在を発生させる作用との一致という考えの内実を紐解くことを試みることにしたい。

2. 腕利きの料理人の比喩と実在的なものの分節

前節で見てきたように、ベルクソンの考える実在を理解するために何よりも避けなければならない解釈は、

現象の背後にはいわば裸の実在がそのままに存在しているということである。ところが、その一方で、実在的なものの自然な分節を語るベルクソンがいる。本節では、実在的なものの自然的な分節が、認識以前に存在する構造ではないことを、『創造的進化』と、補助線として、それ以前の1901年の「心身平行論と実証的形而上学」を用いて、確認する。そのことを通じて、形式＝形相／内容＝質料の区別に関する、ベルクソンに独特で奇妙なアイデアを取り出したい。

ドゥルーズはベルクソンの直観を特徴づける際に、「ベルクソンが好んで引用する」と述べながら、よい弁証家を腕利きの料理人に例える『パイドロス』のテキスト⁵を好んで引き合いに出す⁶。事実、『創造的進化』のある箇所ではベルクソンは次のように述べている。

プラトンはよい弁証家を腕利きの料理人に例える。その料理人は、自然がその形を描いた *dessiné* 関節に沿って、骨を砕くことなく動物を切り分ける。(EC, p. 157 強調引用者)

本性の差異あるいは実在的なものの分節に従って、現実には与えられている混合物を分割するという、ドゥルーズが解釈したベルクソンの直観の典型を、ドゥルーズはこのテキストの中に見て取っている⁷。直観に関するドゥルーズのこのような解釈は、確かに間違っているわけではない。認識主観の側に由来する概念に即してではなく、実在的なものの分節に即して対象を切り分けるということは、的確さを求めるベルクソン哲学の一つの特徴を示している⁸。

しかしながら、「実在的なもの」や「分節」という語が、正確にいつどのようなものを指示しているのかを問い返す必要はあるだろう。実際、ドゥルーズは、「実在的なものの分節」とは「諸傾向」のことであり、それは「権利上」においてのみ存在するものとして解釈している⁹。そして、ドゥルーズに従えば、これらの傾向は潜在的なものであり、分化は、これらの傾向に沿った、潜在的なものの現実化のことである¹⁰。言い換えると、この現実化においては、可能的な形ですでに潜伏していたものが単に発現したのではなく、諸傾向に沿って新しいものが創造される。新しく創造された現実的なものは諸傾向に還元しつくされることはないし、また、諸部分が現実化した後なおも潜在的なままにとどまる諸傾向は、それに沿って創造された現実的なものによって説明しつくされることもない。

ドゥルーズとともに以上のような特徴を「実在的なものの分節」に認めた上で、しかし、さらに、諸傾向の現実化とともに「実在的なものの分節」がより明らかになるという性格を重く取る必要があるのではないだろうか¹¹。すなわち、実在には、その現実化した要素によっては説明しつくことができない余剰が、つねに汲みつくしがたくあるのだとしても、現実化した要素は、実在の要素として、実在の中に組み入れることができるのではないか¹²。

実際、ベルクソンが後の著作で用いる方法のいくつもの萌芽を見出すことができるテキスト、1901年の「心身平行論と実証的形而上学」の中には、そのような考えを見出すことができる。

単純に洞察しただけでは、ある概念が理解可能なものか否かを言うのは難しいと思います。理解可能性がその概念にやってくるのは、それが適用されることによって、少しずつです。ある観念の理解可能性を測ることができるのは、それが暗示するものの豊かさであり、その適用の広さ、多産性、確実さであり、観念によって私たちが実在的なものの中にいわばそのまま置きいれることができるようになる分節の増えていく数であり、そして観念の内的なエネルギーだけなのです。(M, p. 473 強調引用者)

ここで念頭に置かれているのは、微分概念や無意識の観念である。特にベルクソン自身が研究の対象とした無意識の観念は、それが矛盾した観念であるとかつては教えていたと彼自身が告白しているように¹³、もともとはその存在すら認められていなかった。見えていなかった「実在的なものの分節」が見えるようになったというのですらなく、そこには「実在的なものの分節」の発明が見出されている。言い換えると、ある

概念や観念の運用が、それらの理解可能性を明らかにし、「実在的なものの分節」を生み出している、というのである。

ここまで見てくればもはや、ベルクソンが実在的なものの自然な分節を語っていたとしても、現象の背後にはいわば裸の実在があるなどという、単純なことを彼が考えていたなどと誤解することはない。ところがその代わり、概念や観念の理解可能性に関するベルクソンの考え方は奇妙なものである。

一見すると、それはプラグマティックな実在観とも受け取れる。確かに、概念や観念の運用によってそれらが更新され、その更新によって概念や観念の確からしさが増大するという点を、この文章から読み取ることによって、そこにある実在観をプラグマティックと呼ぶことができるだろう。しかし、これを端的にプラグマティックと呼ぶには、実在の側が主導権を握りすぎているように思われる。というのも、概念や観念の理解可能性を示すとされるのが、それらが実在なるものをよりよく説明できたという現実ではなく、それらのもたらすであろう豊かさや多産性という可能性なのだから。

しかも、ある概念や観念と実在との合致ではなく、それらのもたらすであろう豊かさや多産性によってそれらの理解可能性が明らかになるにもかかわらず、それでもベルクソンは、概念や観念と実在との合致の正確さを問うことができると考えている。上記引用を含む段落の末尾で、次のように述べられている。

精神が対象に向き合うなんらかの態度のことを、あるいは探求の形式が探求の質料へとなんらかの仕方で適合することを、方法と呼ぶなら、ある方法が遂行される素材が根本的に変わっても、変わらずに探求の手法を保ち続けるのは、ある方法に忠実であり続けるということにはならないでしょう。ある方法に忠実であり続けるというのは、反対に、いつでも同じ正確さを保って調節できるように、質料に合わせて形式をつねに作り直す remodeler ことです。(M, p. 474 強調引用者)

このように述べることでベルクソンが確保しようとしていたのは、無意識の観念の正当性である。意識に現前できることを存在とする旧来の意識概念からすれば、無意識の存在は形容矛盾に等しい。そこで、無意識の観念を認めるためには、意識概念を改変する必要がある。ベルクソンは、『物質と記憶』で行った意識概念の改変の必要性を、ここでは、探求の質料が変わったことに伴って探求の形式を改変する必要性として説明しているのである。そして、その必要性は、無意識の観念が運用されることによって初めて明らかになるはずの、豊かさや多産性が保証しているのだ、と。

ここで述べられている形式と質料には、ある意味では融通無碍なようにも見える、ベルクソンの形式／質料観が表れているように思われる。すなわち、「質料に合わせて形式を作り直す」と述べるベルクソンは、形式が暫定的なものにすぎないと考えているというよりは、むしろ質料の方が形式に規定を与えると考えているのである。

さらに踏み込んで考えてみよう。上記引用では、探求の形式と質料の適合が問題にされている。しかも、それは正確さを問うことができるものである。例えば統計処理を行うときに、同じデータを扱っても分析手法に応じて、際立って浮かび上がるポイントが異なってしまうように、分析手法に適切さの程度があるということであれば、何ら不思議はない。しかし、探求の形式と質料の適合の正確さを問えるためには、質料に適した形式が存在することを前提としなければならない。言い換えると、ここではすでに、形式の質料への適合可能性が前提とされている。これは不思議なことである。

というのも、無意識の観念は、探求の質料にふさわしいどころか、元々それに適合する可能性すらないと考えられていた形式としてしか存在していなかった。しかし、それでも適合の正確さを問うことができるとされるのは、その正確さがアプリアリに測定できるものではなく、ある観念を実際に適用した後でしか、しかもその観念が暗示する豊かさによってしか測定されない、とベルクソンは考えているからである。そうであるから、質料に、その中から形式を取り出してくることができるという性格を、そしてそれゆえに、質料から取り出されてくる形式には、質料に適合できる可能性が認められているのである。ここには、形式にモ

デルを与えるものとしての質料という考えを読み取ることができるように思われる。

3. 自らの形式を反省する本能としての直観

前節では、実在的なものの自然な分節が、いわば裸の実在として先在しているものではなく、現実化によってその姿を現す潜在的な傾向であるにもかかわらず、例えば無意識の観念のように、その運用（運用を現実化と読み替えたい）によって実在的なものの分節がしだいに明らかになる（このことを実在の発生と読み替えたい）、ということを確認した。そして、そのような実在の性格を、形式と質料の間にある内在性として考えるというのが、本稿における解釈である。それは、形式と質料の間にある内在性と、直観における認識と実在の間にある内在性とを重ね合わせて理解するためである。

本稿において残す課題は、二つの内在性の重なりを、その点だけに絞って、『創造的進化』のテキストに即して確認することである。すなわち、本能が直観になるためには知性が必要であるとされる理由に、二つの内在性の重なりを見出すことにしたい¹⁴。

さて、『創造的進化』の第2章では、知性と本能（それらはドゥルーズが実在的なものの分節である「諸傾向」の具体例として挙げている）のそれぞれが特徴づけられてきた後で、次のように述べられている。

知性がなければ、直観は本能の形で、実践的にその利害関心にかかわる特別の対象に釘付けになったままで、その対象によって外在化されて移動運動になったままに留まっていたことだろう。(EC, p. 179)

直観にとって知性が必要であったと述べられていることは明らかである。蜂が攻撃対象の急所を針で刺して仕留めるという仕方でのみ、蜂がその急所を知っているように、本能は特定の対象に対する行動という形での（こういってよければ）認識である。直観は、知性のおかげで、自らの利害関心にかかわる特定の対象に限定されることがなくなった、とされている。

ところで、この知性の寄与分とは何なのか。ベルクソン自身の答えは、彼が行う、直観の定式化のなかでも表現されている。

直観は私たちを、生のまさしく内部へと導くのである。私はこの直観を、無関心になり、自分自身について意識的になり、自らの対象について反省でき、対象を無際限に拡大できるようになった本能と呼びたい。(EC, p. 178 強調引用者)

（自我の覚知の場合にも見られる）自己意識と反省こそが、本能を直観へと高める。ここに知性の寄与分がある。しかし、知性が本能に自己意識と反省をもたらすということを、知性が自らの形式性を本能に付与することで本能を（自己意識を伴う）認識へと高めると解釈してもよいのだろうか。

ベルクソンは知性に形式の認識を、本能に質料の認識を割り振るのだから、一見すると、そのような解釈が成り立ちそうにも思える。確かに、ベルクソンは次のようにはっきりと述べている。

私たちは、知性と本能の区別について、より適切な次の定式を与えよう。すなわち、知性は、それがもつ本有的な点において、形式の認識であり、本能は質料の認識を含む。(EC, p. 149f. 強調原著者)

しかしながら、この二つの認識の割り振りは、どれだけ絶対的で排反的なものなのだろうか。もちろん、ドゥルーズとともに、知性と本能の間に本性の差異を認めるべきなのだが、そうだとすると、本性の差異があるからといってそれに付随して、形式と質料の間にも絶対的な乖離を認めるべきではないように思われる。

ベルクソンは、どの質料に対しても無関心に形式を与える知性のありようを認めるために、「質料を欠い

た形式はすでに一つの認識の対象でありうるだろうか。ありうる、間違いなく」(EC, p. 149) と自問してみせる。製作的な知性は、質料に制約されることのない形式を付与するものとして考えられている¹⁵。

製作はある質料のうちに対象の形式を裁断する。[…] 製作を目指す知性は、諸事物の実際の形式に決してとどまらず、その形式を決定的なものとみなさず、反対にどんな質料も恣意的に裁断しうるものとみなす知性である。(EC, p. 156f. 強調引用者)

それに対して、形式を欠いた質料は一つの認識の対象でありうるだろうか、と問われることはない。質料のない形式認識の空虚さが問われるのであれば、形式のない質料認識の盲目さも問われてもよいように思われる。なぜなら、ベルクソンが主張するように、本能が、「(表象されるのではなく、むしろ体験される) 直観」(EC, p. 176f. 強調原著者)、あるいは「共感」だとしても、つまり本能それ自体が表象や知性的な認識ではないのだとしても、本能が直観へと高められたときには、自己意識を持つようになるからである。自己意識を持つに至った本能による認識は、それでも形式がないものというわけにはいくまい。

少なくとも知性によってその形式が与えられるわけではない。そうでなければ、ベルクソンは腕利きの料理人の比喻を用いて実在的なものの自然な分節を語ることはできない。「製作を目指す知性は、諸事物の実際の形式に決してとどまら」ない。確かに、知性によってもたらされる、直観の無関心さや対象の広さは、知性が形式の認識であることに由来する。しかし、それは、形式認識である知性が、質料認識の本能に形式を与えるということではない。知性の寄与はあくまでも自己意識へと向かわせることにあるにすぎない¹⁶。

知性でないなら、何によって直観は自らの形式を与えられるのか。形式は初めからあったというべきであるように思われる。そして、知性は本能に自己意識を持たせることによって、本能にそのことを気付かせただけのように思われる。実際、ベルクソンは、次のように述べている。

知性を特徴付けるのは、生への本有的な無理解である。／反対に、本能はまさに生の形式に合わせて形作られる。(EC, p. 166 強調原著者)

そこで、行動から出発して、知性がまずもって製作を目指す想定しよう。製作はもっぱら生の質料に行使される。それは、製作が有機的な素材を用いる場合でさえも、製作はその素材を生命のない物体として扱い、素材に形を与える informer 生を気に掛けない、という意味である。(EC, p. 154)

直観が自己意識を持つことによって気づくことができた形式とは、生に対して無理解な知性が任意に持つことができる形式ではない。また、その形式は、本能が認識する質料とは無関係なものでもない¹⁷。本能が質料認識にすぎないのに対して、直観は、本能が認識する質料に適合した形式を、それにもかかわらず形式として認める。本能が行動として表していた生の形式、あるいは生が物質に形を与える成形作用に気づくためには、自らの利害関心から離れる必要があり、知性はまさしくそこに寄与する。繰り返して言えば、知性が自らの形式を本能に与えるのではなく、直観によって把握される形式は、質料の中から、それに適したものとして浮かび上がる形式なのである。

したがって、主観の側で用意される形式とは異なる、質料に適した生の形式は、直観が自己意識を持ち、気づくことで初めて現れる。ここに、覚知と存在の一致、認識作用と実在を発生させる作用の一致を見ることができよう。要するに、ベルクソンが実在として考えていたのは、形式を欠いた質料でも、質料を欠いた形式でもなく、質料の中からそれに適した形式を浮き上がらせる生の力能そのものである、と言えるのではないだろうか。

4. 結論にかえて

以上のことから、ベルクソンの直観の対象である実在がもつ特徴の一つが、質料に適合し、質料に導かれて現れる形式であると述べるができるだろう。だが実際には、そのことを事柄としても確証するために必要な多くの議論が、なおも手つかずのままになってしまっている。例えば、*forme/matière* それぞれの意味の多層性を『創造的進化』全体を通して丹念に整理していく必要があり、そのことは同時に、アリストテレスやカントのテキストに戻りながら、彼らの *forme/matière* 概念との正確な対照を必要とするだろう。しかし、それらは残された課題として登録することにして、ベルクソンが考える実在の一つの性格を明らかにできたことを本稿における成果としたい。

註

ベルクソンの著作からの引用は、慣例に従い、以下の略号を用いて示す。

Henri Bergson, (EC) : *L'évolution créatrice* [1907], P.U.F., coll. « Quadrige », 2007.

——, (PM) : *La pensée et le mouvant* [1932], P.U.F., coll. « Quadrige », 2009.

——, (M) : *Mélanges*, P.U.F., 1972.

¹ フランソワは、ベルクソンが真理を実在の論理的な枠組みとするのではなく、真理が実在に内在しているとする点で、実在がそれ自身の把握に内在的であることを強調している。Cf. Arnaud François, *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche. Volonté et réalité*, P.U.F., coll. « Philosophie d'aujourd'hui », 2008, p. 188.

² Cf. PM, p. 182.

³ ベルクソン自身が次のように述べている。「というのも実際、この『[意識に直接与えられたものについての] 試論』の主要な目的の一つは、心理学的生が一でも多でもないこと、その生が機械的なものも知性的なものも超越していることを示すことであった。すなわち、機械論と目的論が意味を持つのは、「判明に区別された多様性」、「空間性」、したがって先在する諸部分の寄せ集めにおいてのみである。「真の持続」は、分割されない連続性と創造とを同時に意味する。本書において、これと同じ考えを生一般に適用し、さらに心理学的観点から生一般を考察する」(EC, p. Xf. 強調原著者)。

⁴ 『創造的進化』における *forme/matière* は多層的に用いられていて、文脈を加味しても意味を一義的に定めることは難しいことも多い。フランソワは編集者注において、『創造的進化』における *forme* の意味を次のように分類している。「種の意味での、生の形態。機能に対する、器官の構造。ある物の形象や形状、これは「*forme*」という語のふつうの使い方と一致する。批判的な狙いにおいて、アイデアという意味での、プラトンの形相。最後に、同じ狙いにおいて、質料＝内容に対する形相＝形式、それはアリストテレス的な意味—アイデアは根本的な無規定なものに形を与えに来る—と同時に、カント的な意味—空間と時間は私たちの直観の形式であって、形式はその内容を練り上げ *élaborent*、その内容は感性の多様として理解される—とで」(EC, p. 485f.)。

本稿の中では、基本的には、形式と質料という語に代表させて訳すことにする。ただし、意味を限定するために、他の訳語を用いている箇所もある。

⁵ Cf. PLATON, *Phèdre*, 265 E.

⁶ Cf. Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2004, p. 11.

⁷ 直観と実在的なものの分節については、以下も参照。Cf. François, *op.cit.*, 162f.

⁸ ドゥルーズ自身が参照要求しているように、『思考と動くもの』の二つの「序論」にはそのような考えが散

見される。例えば、「すでにできあがった概念を取り除くことから始め、実在的なものの直接的なヴィジョンを想定し、その上でこの実在をその分節を考慮に入れながら分割するなら、自らを表現するためにうまく形成されなければならない新しい概念は、今度は正確に対象に応じて切り分けられるだろう」(PM, p. 23 強調引用者)。

⁹ Cf. Deleuze, *op.cit.*, p. 12f.

¹⁰ Cf. *ibid.*, p. 97.

¹¹ ベルクソンは、初め不明であったある観念が次第に明晰になっていくという性格を、彼の直観の説明に何度も用いている。ベルクソンの直観を大きく特徴づける、初め不明であったある観念が次第に明晰になっていくという明晰性については、別稿で論じた。Cf. 清塚明朗「ベルクソン直観論における明晰性について」、『フランス哲学・思想研究』19、2014年、137-145頁。

¹² Cf. 「判明ではなく、また分割されることすらない、純粹に強度的ないし質的多様性という考え、すなわち、この多様性がそれ自身であり続けながらも、それを考察する新しい視点が世界の中に現れるのに応じて、無際限に数が増えていく諸要素を内包しているという考えを、この論理は受け入れない」(PM, p. 19 強調引用者)。

¹³ Cf. M, p. 475.

¹⁴ 形式と質料の適合がどのようにして確保されるのかについては、知性の領分とされる物質の認識と、直観の領分とされる生一般の認識とでは、事情が異なっているように見える。物質の認識については、『創造的進化』第3章における物質と知性の同時発生議論が、その直接的な答えを提示している。物質と知性の同時発生議論、およびベルクソンが巻き込まれていた、科学的認識をめぐる当時の論争状況については、次のものを参照。Cf. 杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社、2006年、178-236頁。

¹⁵ それゆえに、フィロネンコは、ベルクソンが『パイドロス』を引用した箇所の前後では、任意に無際限に分割を行う能力として知性を規定するという段落全体の趣旨に即して、「物質の構造」を認めていないと解釈している。「ベルクソンは、もっぱら形式的な知性という彼の考え方に引きずられて、物質と記号的な知性との間に恒久的な「議論」を見ていて、彼が『パイドロス』265Eを引用して何を語ろうとも、物質の直接的な所与、言い換えるとその構造を無視している」(Alexis Philonenko, *Bergson ou de la philosophie comme science rigoureuse*, Cerf, 1994, p. 296)。しかし、そのような物質＝質料にも、それらに適した形式＝形相があると解釈すべきであるように思われる。

¹⁶ 知性と反省の関係については、EC, p. 159f.を参照。

¹⁷ 物質＝質料と形式＝形相との排他的構図の破棄については、次のものを参照。杉山、前掲書、第六節。